

英語コーパス学会 Newsletter No. 89

Dec. 15, 2020

■会長: 石川 慎一郎
■事務局: 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡744 九州大学大学院言語文化研究院 内田論研究室気付
■郵便振替口座: 00930-3-195373 (英語コーパス学会)
■URL: <https://jaecs.com/> ■e-mail: jaecs.hq@gmail.com

JAECS
Japan Association for English Corpus Studies

NL89号 目次

会長挨拶	1
英語コーパス学会第46回大会講演・シンポジウム・発表概要	2
講演	2
シンポジウム	3
第1日	4
第2日	5
非会員の研究発表	6
2020年度第2回総会報告	8
役員会報告	8
事務局からの報告	8
会費の引き下げ・学会誌の配布形態の変更	8
2021年度行事予定	8
会費納入のお願い	9
会員情報更新のお願い	9
新入会員紹介	9
FORUM	10

会長挨拶

石川慎一郎 (神戸大学)

学会改革について

早いもので、第7代の会長に就任してから、半年以上が経過いたしました。就任のあいさつでも申し上げたように、この間、時代の変化に対応できるよう、学会の足腰を強化すべく、必要な組織の見直しを行ってまいりました。みなさまには、春季・秋季の総会にて、各種の議案をご承認いただきましたこと、改めて御礼申し上げます。以下、この間の改革の骨子を改めてご報告申し上げます。

(1) 執行部体制の強化

これまで、会長1名、副会長1名、事務局若干名

が会務を主として担ってまいりましたが、仕事量に比べると陣容が手薄であったことは否めません。会則変更を経て、2020年度より、会長1名、副会長3名、会計・総務・広報担当者各2名の体制で会務を担っております。

(2) 役員会体制の強化

これまで、20名程度の理事が理事会を構成して学会の諸問題の審議を行ってまいりましたが、2020年度より、若い方も含め、より多くの声を会務に反映すべく、新たに幹事の職を設け、16名の方に就任いただきました。2020年度は、理事・幹事あわせて35名で役員会を構成し、各種の審議・検討を行っていただいております。なお、その都度の役員会の審議内容はウェブですべて公開し、会員の皆様に常時確認いただけるようにいたしております。

(3) 大会の企画・実施体制の見直し

これまで、本学会の大会は、大会企画委員会の原案を参考として理事会がプログラムの詳細を決定し、実施してまいりましたが、2020年度より、大会企画委員会を大会実行委員会に改組し、企画・準備・実施まで、一貫した体制で担当していただくこととなりました。これにより、役員に限らず、より多くの会員の皆様に大会企画や運営の仕事に参加していただける枠組みが整ったこととなります。本年10月には、この新たな体制の下、第46回大会が成功裡に実施されました。

また、同じく2020年度より、若手会員の研究奨励のため、新たに「学生優秀発表賞」が設置され、学生による優秀な大会発表に賞を贈り、顕彰することとなりました。

(4) 会則・規程の整理

学会の基本ルールを定めた「会則」を全面的に見直しました。前述の(1)～(3)に関わる改訂のほか、条文間の整合性を高め、内容や文言を現状に合うよう修正しました。また、2021年度より、学会誌の印刷版の全員送付の停止と、年会費の引き下げを行うこととなりました。このほか、本学会には、長い歴史の中で、多くの規程や内規が作られていましたが、新たに統一的観点から内容・文言を精査し、会員に関わる規程として4種（研究会規程／学会賞規程／学生優秀発表賞規程／功労会員規程）、役員会に関わる規程として5種（学会誌編集委員会規程／学会賞選考委員会規程／大会実行委員会規程／旅費支給規程／文書等保管規程）を整備しました。これらはすべてウェブに公開し、会員の皆さまにご覧いただけるようにいたしております。

なお、春季の総会では、学会改組の方向性（英語以外の言語を対象としたコーパス研究まで範囲を広げ、あわせて学会名称を変更する）についても会員の皆さまのご意向を伺ったところですが、この点については役員会で承認とならず、現在の枠組みで今後とも活動の充実を図ることになりました。あわせてご報告申し上げます。

研究会・大会について

本年度は、コロナ禍の影響で、対面での研究会・大会の実施を見送りましたが、去る10月3～4日には、国内外から300名の参加者（登録者）を得て、オンライン形式で第46回大会を盛會理に実施することができました。発表・聴講くださった会員各位、また、企画を担当された大会実行委員会（委員長：アントニ・ローレンス理事）に深く御礼申し上げます。なお、2021年度の春季研究会は関西大学で、秋季大会は神戸大学で開催予定です（※時期の見直しやオンラインへの切り替えの可能性もあり）。コロナ禍が続く中で、学会活動にも制約が続きますが、本年度の大会同様、様々な工夫を行い、学会として、活発な研究活動を継続してまいりたく存じております。会員の皆様には、引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

英語コーパス学会第46回大会講演・シンポジウム・発表概要

第46回大会は2020年10月3日（土）～10月4日（日）にオンラインで開催されました。約40本の講演・研究発表があり、内外より300人を超える参加者（登録者）を得て、盛會裡に終了しました。

今大会より新設された学生優秀発表賞には、Hu Xiaolin氏（東京外国語大学）の“A Validation Study of the Accuracy of Lexical Diversity Tools”が選ばれました。おめでとうございます。

以下に、講演・シンポジウム・発表の概要報告を掲載します。講演とシンポジウムは要旨の再掲です。研究発表は、大会後に概要報告のご提出があった分のみ掲載しています。ここに掲載のない研究発表の概要につきましては、第46回大会プログラムをご覧ください。なお、今回の大会では非会員による研究発表枠が設けられました（第1日第3セッション、第2日第4セッション）。その概要報告は、発表者ではなく大会実行委員長によるものです。

講演

‘Corpus Linguistics’ or ‘Linguistics with a Corpus’?

Jesse Egbert (Northern Arizona University)

Corpus linguistics encompasses a vast array of empirical research. It appears that there is only one characteristic that holds true for all corpus linguistic studies: the use of a corpus. I propose that it is not only possible to use a corpus without doing linguistics; it is actually quite common, even in mainstream research publications. So what do I mean by using a corpus *without doing linguistics*? Linguistics can be defined simply as the scientific study of language. I propose that linguistics requires at least three conditions: (1) linguistically meaningful variables, (2) linguistically valid units of observation, and (3) linguistic description. In the absence of any one of these three conditions, (quantitative) corpus linguistics

can quickly become nothing more than pattern hunting and number crunching. In essence, a computer can perform quantitative corpus analysis, but only a linguist can do linguistics with a corpus. Drawing on the research traditions of syntactic complexity, lexical dispersion, and keyword analysis, I will illustrate the importance of these three conditions by comparing studies that satisfy them to studies that don't.

NLP Beyond NLPers—the many faces of NLP in academia and real-world

Sowmya Vajjala
(National Research Council Canada)

Natural Language Processing is an active area of research and its impact is also seen in many day-to-day applications we use, from generic tools such as email software to specialized ones such as language learning apps. Apart from being an active area of enquiry in itself, NLP methods are widely used in many disciplines, from linguistics to economics, from psychology to plant science. In this talk, I will introduce some common NLP practices, show how NLP differs between academia and industry, and discuss areas where NLP is useful beyond its home turf, including its use in corpus linguistics research. Drawing on my experiences as an NLP researcher and instructor, I will also touch upon what NLP can learn from corpus linguistics and other areas of study, and what is needed to train diverse groups interested in using NLP methods in their work.

シンポジウム

小・中・高における DDL 普及への挑戦—DDL ツールの開発, 授業実践, 分野横断的考察

西垣知佳子 (千葉大学), 赤瀬川史郎 (Lago 言語研究所), 水本篤 (関西大学), 石井雄隆 (千葉大学), Peter Crosthwaite (University of Queensland), 安部朋世 (千葉大学), 物井尚

子 (千葉大学), 小山義徳 (千葉大学), 星野由子 (千葉大学), 神谷昇 (千葉大学), Pichinart Kumpawan (Surasakmontree School)

本シンポジウムは DDL SIG の企画である。DDL (data-driven learning) は、主に大学生を対象として世界的に利用が広がっている。本 SIG 企画は、日本の小・中・高校に DDL を導入するための試みと成果を、以下の 4 点から報告、検討する。

1) 小・中・高校生のための 3 種のウェブ DDL ツールと教材：eDDL, hDDL, BES Search

まず、これまでに学校現場で実施してきた DDL 実践の結果明らかになった DDL の成果を報告する。続いて、小・中・高校の英語授業で DDL を普及させるために開発した 3 種類のウェブ DDL ツールを紹介する。これらのツールは、学習者の英語力と認知レベルに合致する学習用コーパスと、使い易い検索ツールを搭載しており、小学生用 DDL ツール (eDDL), ならびに中・高生用 DDL ツール (hDDL) を開発した。併せて、教師が DDL 教材作成に利用できる入門・初級レベルの英文を収集した検索ツール (BES Search) を開発した。全て登録不要、無料で利用できる。

2) DDL 実践の分野横断的考察

教育心理学の観点から、DDL における発見学習の効果を検討する。また、発表者らの行う DDL では、学習者は帰納的に英語の文法規則を発見し、日本語で言語化する。学習者の発見内容を見てみると、国語科で学んだ知識を使って、英語の文法規則を記述していることがわかった。そこで、文法に関連する事柄が、外国語科と国語科の検定教科書で、どのようなことが、どのように学ばれているかを調査した。その結果を報告する。

3) DDL の指導と評価

既存の大学生用 DDL 評価テストと質問紙調査を検討し、小・中・高校生用の評価テストと質問紙の開発に向けた構想を述べる。

4) 国際的視点から考える DDL

本プロジェクト独自の DDL をタイ・バンコクの中学校英語教師が実践した事例を紹介する。また、

pre-tertiary learners の DDL 研究の先駆者である University of Queensland の Crosthwaite 先生に、海外での初等・中等教育における DDL についてお話しをいただく。以上を踏まえて、最後に、日本の初等・中等教育における DDL の活用について検討する。

第1日

Using the USAS Semantic Tagset to Explore Persuasive Language in Jeremy Taylor's Holy Living and Holy Dying, 1650–1651

THOMAS, Dax (Meiji Gakuin University)

This presentation reports on the initial stages of a study on persuasive language in two texts, *Holy Living and Holy Dying*, written by Jeremy Taylor in 1650 and 1651. The purpose of the study is two-fold: 1) to explore the persuasive language Taylor uses in his writing; and 2) to explore the usefulness of semantic tagging in this type of investigation. The corpus, consisting of the two Taylor texts (226,035 tokens), was first tagged with the USAS Semantic Tagset using the Wmatrix interface. A list of key concepts (semantic keyness) was generated using the Wmatrix interface and concordance lines were consulted for finer detail on the nature of the persuasive technique being used. Several persuasion techniques (such as “emotional appeal”, “attack”, “inclusive/exclusive language”) were selected and semantic tags were identified from the USAS tagset that related to each of these persuasion techniques. When exploring “emotional appeal”, for example, the “E” tag (Emotion) was used as a search item. While not all semantic tags resulted in useful search results, it was found that Taylor seemed to prefer negative persuasion techniques, such as appeals to fear and sadness in his writing. This is illustrated well by four out of the top five most frequent Emotion-related items be-

ing E4.1- (repentance), E5- (fear), E4.1- (sorrow), and E4.1- (sad). By working with a general-to-specific approach — that is, from persuasion technique, to general semantic concept category, to specific lexical item — elements of persuasion in the text could be readily identified.

ムーブと形容詞の振る舞いから見た航空会社プロフィールのディスコース分析

仁科恭徳（神戸学院大学）

本発表では、タグ付けした DIY (Do It Yourself) コーパスを用いて量・質の観点から航空会社のプロフィールを分析した結果を報告した。特に、当該プロフィールのムーブ（構造）と形容詞の振る舞いに焦点を置き、各航空会社が属している3つのアライアンス（スターアライアンス、ワンワールド、スカイチーム）間での量的・質的な違いや、航空会社プロフィール全般に通底している共通性に関して調査した結果を発表した。

ムーブに関しては、ムーブの種類、各ムーブの重要性、典型的なムーブ構造に関して検証した。形容詞の振る舞いに関しては、形容詞＋名詞の連辞的结合 (colligation) や best + AWARD といった優先的意味選択 (semantic preference) に注目して分析を進めた。

ビジネス・コミュニティにおいて、プロフィールは代表的ジャンルの一つである。よって、このジャンルにおいて共有され慣習化されている言語実態を暴くことで、ビジネス・コミュニティに通底している知識や文化の理解を深めるだけでなく、English for Business Purposes (ビジネスに特化した英語 (教育)) における教材開発やシラバスデザインの元資料としても有効に活用することができるはずである。

本研究で設定した主なリサーチ・クエッションは以下のとおりである。

1. コーパス・データに基づく各種プロフィールの基本的な異なり
2. 当該プロフィールで使用されているムーブの特定（種類と数）
3. 当該プロフィールにおける各ムーブの必要性

の数値化

4. 当該プロフィールにおける典型的なムーブ構造の解明
5. アライアンス間における形容詞の振る舞いの類似性と相違性

1～5 のリサーチ・クエスチョンをもって、当該プロフィールの実態を精緻に暴いた。1 は当該プロフィールと他のプロフィールとの違いの可視化、2～4 は当該プロフィールが担う伝達機能の解明、5 はよりマイクロな視点から分析した当該プロフィールの特徴の解明を目的としている。例えば、リサーチ・クエスチョン 2 に関しては 18 種のムーブが認められ、リサーチ・クエスチョン 3 に関しては 2 種のムーブが義務的、3 種のムーブが慣習的に使われていることが分かった。

第 2 日

Extending vocabulary profiling to languages other than English

Laurence ANTHONY (Waseda University), Natalie FINLAYSON, Emma MARSDEN, Rachel HAWKES, and Nick AVERY (National Centre of Excellence for Language Pedagogy, University of York)

Vocabulary profiles of corpora are often created as a step towards creating and/or modifying pedagogic materials for a target learner audience. Two of the most used desktop vocabulary profiling tools are Range and its more modern equivalent AntWordProfiler. For online vocabulary profiling, Web VP tool, which is part of Compleat Lexical Tutor is a popular alternative. All these tools can in theory be used to profile texts of any language. However, they rely on levelled vocabulary lists where each item in the list is grouped according to its “word family”, “flemma”, or lemma category. They also rely on each item in a list being a single string of characters (i.e words). These limitations introduce problems when attempting to profile lan-

guages such as English and French (and almost all other languages) which are composed of both single- and multi-word units. They also hugely complicate the process of vocabulary profiling for languages with a high degree of declension such as German and Spanish. In this presentation, we will first discuss the problems of vocabulary profiling in English and languages other than English. Next, we will explain how an existing desktop profiling tool was adapted for use at the National Centre for Excellence for Language Pedagogy (NCELP), UK to assist researchers in the creation of curricula specifications for the teaching of Spanish, French, and German vocabulary and also teachers hoping to implement these specifications. Then, we will explain the next stage of the project, which is to develop an open-access, online version of the tool.

A corpus based approach to creating an advanced wordbook for university students

Satoru UCHIDA, Takehiko SHIMIZU, Saaya KIMURA (Kyushu University)

The purpose of the present study was to report on the creation of an advanced vocabulary wordbook for university students. The book, titled “Word Quest” (Kyushu University Press), aims to cover advanced vocabulary that students are likely to encounter when developing their expertise. It contains about 1500 words and phrases in total with three main sections of “Academic”, “SDGs” (Sustainable Development Goals) and “Studying abroad.” The words in the former two sections are selected based on our original corpus consisting mainly of academic books and papers. Some examples are “agitate”, “ephemeral”, and “viable” from the academic section and “eradicate”, “infectious”, and “sewage” from the SDGs section. To the best of our knowledge, this is the first attempt to group words along the framework of SDGs, and it was reported how we achieved

this objective. It was also shown how we created this book collaboratively with university students as an attempt to cover their actual needs in their current and future studies.

To examine the usefulness of our wordlist, a quantitative analysis was carried out using online news articles. It can be assumed that news passages contain advanced vocabularies that are essential for understanding the current issues around the world, hence important for university students who wish to get continuous updates on the world trend. For this purpose, 408 articles published in a week were collected from the BBC website with average length of 681.6 words. It was shown that 70.6 percent of the articles contain at least three words from the book and 96.1 percent contains at least one. It was also shown that about one third of the headwords of the Academic and SDGs sections appeared in the minicorpus. Even though the words in our list are mostly specialist terms and are not high in frequency, the results show that the book successfully covers what university students encounter when they research current and global issues online.

非会員の研究発表

アントニ・ローレンス (早稲田大学)

Sessions 3 and 4 of the JAECS 2020 Conference took place on October 3 (Sat) and October 4 (Sun), 2020, respectively. The sessions were a first for JAECS annual conferences in that all the presenters in the sessions were JAECS non-members. Session 3 comprised 12 presentations by international scholars from around the world. As the session was held in the mid-afternoon, the time difference dictated that presenters based in European countries such as Germany, Poland, UK, Spain, and Turkey would be given priority for this slot. However, researchers from Saudi Arabia also gave presentations in this slot. Ses-

sion 4 comprised 10 presentations by international scholars from other locations in the world. As the session was held in mid-morning, again, the time difference dictated that presenters based in non-European countries were given priority, including Australia, US, Hong Kong, Philippines, Indonesia, and Japan.

The two sessions were organized in a similar manner to traditional poster presentation sessions. Presenters in both sessions were asked to upload video presentations prior to the conference. These were made available to all conference participants via the conference website, giving everybody an opportunity to watch all the presentations in advance and consider their questions and suggestions. Then, during the conference, both sessions were scheduled for 1-hour, during which time all presenters would be available in separate online rooms (on the Zoom video platform) to summarize their research results and answer questions. Presenters and participants could also communicate via a comments section below the video presentations on the conference site.

The two sessions featured a broad range of corpus-related research topics, which generated lively discussion. Also, according to the post-conference survey, the international atmosphere generated by the sessions appeared to be well-received by JAECS members, with many of them suggesting that non-JAECS member presentations should become a regular feature of the conference.

The presentations given in Session 3 are as follows:

- Elen LE FOLL (Osnabrück University). Issues in Compiling and Exploiting Textbook Corpora
- Lukasz GRABOWSKI (University of Opole). Phrase Frames as an Exploratory Tool for Studying Translation Patterns: A Corpus-Based Descriptive Study

- Niall CURRY (Coventry University), Robbie LOVE (Aston University), Olivia GOODMAN (Cambridge University Press). Investigating Publisher Application of Corpus Research on Recent Language Change To ELT Coursebook Development
- Jamie WILLIAMS (Nottingham Trent University), David WRIGHT (Nottingham Trent University). Pronominal Ambiguity and Ascriptions of Responsibility in the UK Daily Coronavirus Briefings
- Ibrahim BASHIR (Jubail Industrial College), Kamariah YUNUS (Universiti Sultan Zainal Abidin). A Corpus Analysis of Prepositional Colligations in Nigerian Legal Discourse
- Barrios LEYRE (Universitat de Lleida), Vázquez GLÒRIA (Universitat de Lleida). Factuality and Conditional Sentences With Indicative Mode: A Corpus-Based Study
- Rosana VILLARES (University of Zaragoza). Corpus Linguistics Tools for the Creation of Linguistic Resources That Support the Internationalisation of Tertiary Education
- Hakan CANGIR (Ankara University), Taner CAN (TED University). Speaking of Extinction: A Comparative Corpus-assisted Analysis of the Environmental Framing in Climate Fictions and the News on the Net
- Yagang CHEN (The University of Edinburgh). Exploring the Use of Hedges in Academic Writing: A Corpus-Based Analysis Between Chinese TESOL Students and Expert Writers
- Xiaojing CHEN (The University of Edinburgh). A Comparative Study of Transition Markers in Thesis Abstracts From Chinese Undergraduates and RA Abstracts From Prestigious Journals

- Mat RAWSTHORNE (The University of Nottingham). Shared Experience: From Illness To We-Illness? Narrative Informed Corpus Linguistic Analysis of a Moderated Online Mood Disorders Forum
- Melissa KEMBLE (The University of Sydney). As Good as the Men? A Corpus-Based Analysis of Media Representations of Athletes Competing in the New Women's Australian Rules Football League

The presentations given in Session 4 are as follows:

- Martin SCHWEINBERGER (The University of Queensland). A Corpus-Based Analysis of Ongoing Change in the Adjective Amplifier Systems of Hong Kong and Philippine English
- Marine Laísa MATTE (Univates University), Larissa GOULART (Northern Arizona University), Simone SARMENTO (Federal University of Rio Grande do Sul), Rozane Rodrigues REBECHI (Federal University of Rio Grande do Sul). Becoming a President: A Diachronic Study on the Language of Brazilian President Jair Bolsonaro
- Yating YU (The Hong Kong Polytechnic University). Media Representations of 'Leftover Women' in China: A Corpus-Assisted Critical Discourse Analysis
- Michael HENSHAW (Hokkaido University). A Novel Approach To the ESP Keyword List: 2815 Entries With Frequent Lexical Bundles for Data-Driven Learning
- Will LINGLE (University of Aizu). Contrasting Narratives: The Greek Financial Crisis in Newspaper Editorials
- Wilfred Gabriel A. GAPAS (University of Santo Tomas), Rachele BALLESTEROS-LINTAO (University of Santo Tomas). The Discursive News Values of the 2017

Marawi City Crisis: A Corpus-Assisted Multimodal Discourse Analysis of Selected Newspaper Reports

- Ashleigh COX and Eric FRIGINAL (Georgia State University). Comparing Measures of Directness in Corpora of Essays Written by Iraqi EFL Learners, Native English-Speakers, and Advanced ESL College Students
- Andrew SCHNEIDER (Embry-Riddle Aeronautical University), Rachelle UDELL (Georgia State University), Eric FRIGINAL (Georgia State University). Sky High: Building a Corpus of English for Flight Training
- Muchamad Sholakhuddin AI FAJRI (Universitas Airlangga). The Construction of Coronavirus in English-Language Indonesian Newspapers: A Corpus-Assisted Discourse Analysis
- 寺田 里紗 (東京外国語大学) . NICT JLE コーパスを用いた日本人英語学習者のイラスト描写における習得レベル別特徴分析

2020 年度第 2 回総会報告

第 46 回大会がオンライン開催となったことに伴い、2020 年度第 2 回総会は 2020 年 10 月 3 日 (土) 16 時~17 時にオンラインで開催され、以下の 1 つの議案が審議されました。

- 第 1 号議案：会則の改定について（会費の引き下げ／学会誌の配布形態の変更）

総会後に行われたオンライン投票の結果、本議案は承認されました。ご協力ありがとうございました。会則の改定に伴う新たな会費と学会誌の配布形態につきましては、本 NL 「事務局からの報告」をご覧ください。

役員会報告

9 月にオンライン会議による役員会を開催しました。審議事項および決定の概要は学会ウェブサイトの「英語コーパス学会役員会審議事項」<https://jaecs.com/doc/yakuinkai.pdf> よりご覧いただけます。

事務局からの報告

会費の引き下げ・学会誌の配布形態の変更

2020 年度第 2 回総会で、2021 年度より、一般会員・学生会員（どちらも国内会員のみ）の会費の引き下げが決定されました。また、2021 年度以降、学会誌については原則として電子版の送付のみとなります。従前どおり、学会誌の印刷版の送付を希望される方は、会費支払い時に 1,000 円を加えて送金ください。会費の変更は下表のとおりです。

	2020 年度まで	2021 年度以降
一般会員 年額	6,000 円	5,000 円*
学生会員 年額	3,000 円	2,000 円*

*学会誌印刷版の送付希望者は +1,000 円

学会誌 28 号（電子版）の刊行は 2021 年 5 月、希望者への印刷版送付は 2022 年 3 月ごろを予定しています。なお、2021 年度の会費振込票は 2021 年 3 月に送付を予定しています。恐れ入りますが、年会費は、年度開始後、できるだけ早期にご送金くださるようお願い申し上げます。

2021 年度行事予定

2021 年度の大会・総会等は下記のとおり予定されています（※コロナ禍の影響により変更の可能性あり）。

- 2021 年 5 月 2021 年度春季研究会（関西大学）
- 2021 年 5 月 2021 年度第 1 回総会（決算・予算、事業報告・事業計画承認など）
- 2021 年 5 月 学会誌 28 号（電子版）刊行
- 2021 年 10 月 第 47 回大会（神戸大学）
- 2021 年 10 月 2021 年度第 2 回総会（2022 年度人事案承認など）

会費納入のお願い

会員の皆様には、日頃より会費の当該年度内納入にご協力をいただきまして、お礼申し上げます。

2019、2020年度会費の納入がまだお済みでない方には、「払込取扱票」を送付しております。銀行窓口・郵便局窓口・オンライン振込のうち、ご都合のよろしい方法で、できるだけお早めにご送金ください。

郵便局からの場合

ゆうちょ銀行
口座番号 00930-3-195373
名義 英語コーパス学会

銀行からの場合

ゆうちょ銀行(コード9900)
種別 当座
店名 ○九九店(ゼロキユウキユウ店)(支店
番号:099)
口座番号 0195373
名義 英語コーパス学会

会費納入に際しましては、次の点にご注意ください。

1. 過年度会費を未納の場合は、2020年度分と合算してお納めください。(※2019年度の未納がある場合に1年分のみを送金されますと、「2019年度分」として充当されます。)過年度会費未納の場合、機関誌などの送付を一時中止させていただいております。
2. 請求書・領収書は原則として発行しませんので、振込控えを領収書としてご利用ください。大学等において、請求書 and/or 領収書が必要となる場合は、学会会計(宇佐美 jaecs.ac@gmail.com)までご連絡ください。
3. 払い込み者が特定できるよう、窓口振込・オンライン振込とも、会員姓名とご所属の両方を明記ください(記入例1:コーパスハナコ

コーパスダイガク 記入例2:コーパス花子(コーパス大学))。

4. 大学等に年会費振込を依頼した場合、払込者が大学名となり、どなたの会費か特定できないケースが発生します。大学等に振込を依頼された場合は、必ず、振込後に学会会計(宇佐美 jaecs.ac@gmail.com)までご一報ください。

会費を滞納されますと、退会時に滞納分をまとめてお支払いいただくといった事態にもなりかねません。会員の皆様におかれましては、円滑な学会運営のためにご協力いただけますようお願い申し上げます。なお、退会を希望される場合は、当該年度内に学会ウェブサイトの「入会・変更届」<https://jaecs.com/join.html> からの手続きをお願い申し上げます。

会員情報更新のお願い

住所、所属、メールアドレスなどに変更のある方は、学会ウェブサイトの「入会・変更届」<https://jaecs.com/join.html> からの手続きをお願い申し上げます。

新入会員紹介

2020年7月3日から2020年12月15日までに入会された方をご紹介します。

岩井優介	東京大学(S)
神澤克徳	京都工芸繊維大学
神原一帆	京都大学(S)
金原いれいね	釧路公立大学
Hu Xiaolin	東京外国語大学(S)
Martin, Jeffrey	Temple University(S)

(五十音・アルファベット順、敬称略。Sは学生会員)

FORUM

今号の FORUM は休載です。

FORUM の原稿募集中！

英語コーパス学会 Newsletter では会員の皆様からの FORUM への投稿を募集しています。国際学会報告，研究会の紹介，新刊紹介など，会員の皆様の情報交換の場として FORUM が活用されることを願っております。以下，詳細を記します。掲載の可否につきましては，事務局で判断させていただきます。

FORUM のテーマ 国際学会報告，研究会の紹介，新刊紹介など英語コーパス学会にとって有益と思われる情報

締め切り 5月末あるいは10月末

分量 800-1600 字程度（画像も可です）

送付先 jaecs.hq@gmail.com

2020年12月15日発行

編集・発行 英語コーパス学会

会長 石川 慎一郎

事務局 〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744

九州大学大学院言語文化研究院

内田諭研究室気付

e-mail: jaecs.hq@gmail.com

URL: <https://jaecs.com/>
